

判断と情動はどのように対立し、また調停されるのか
How Judgments and Emotions Conflict and are Mediated

太田泰幹

Abstract

If judgment and emotion conflict, it would seem that we should make decisions or act according to judgment and not according to emotion. However, the episode of Huckleberry Finn's dilemma introduced by Jonathan Bennett (1974) suggests that it is possible to be praiseworthy or rational to make decisions or act according to emotion rather than judgment. In this paper, I will show that to resolve the issues surrounding Huckleberry Finn's dilemma, it is necessary to elucidate how judgments and emotions conflict and are mediated. Then I will present a model that explains its mechanism.

(1) 研究テーマ

情動とは何か、というテーマは論争的であるが、現代の標準的な見解によれば、情動は表象として説明される (Scarantino 2021)。たとえば、足下にへびが這い出てきたのを見つけ、怖くて飛び退るとき、恐怖は私にとってへびが危険であることを表象している。また、行為の観点からみれば、恐怖は飛び退るという行為に理由を与えている (Döring 2013)。つまり、へびが危険であると評価したから、私はへびから逃げたのである。このように、情動は主体と世界の関係を表象し、また行為に理由を与えるという役割をもつ。

ただし、そのような役割は情動だけでなく、判断も果たしうる。そして、情動の表象する内容や与える理由と判断の内容や理由はしばしば食い違う。たとえば、私はへびに詳しく、這い出てきたへびがアオダイショウで、こちらから刺激しない限り襲ってくる可能性は低く、万一噛まれたとしても無毒なため、危険はないと直ちに判断できたとしよう。このとき、〈このへびは危険である〉という情動の内容と〈このへびは危険でない〉という判断の内容は対立するが、両者を比較すると判断の方が正しく、またへびから逃げる理由もないように思われる。このような考えを一般化すると、次のような主知主義的 (intellectualist) 見解になるだろう。すなわち、情動と判断が対立するときは、判断の方が内容や理由において適切なため、判断に従って意思決定や行為をするべきであり、情動に従って意思決定や行為をするべきではな

い。

〈ハックルベリー・フィンのジレンマ〉は、このような主知主義的見解に対する反例とみなすことができる。Bennett (1974) による導入以降、このエピソードは後述の通り多くの哲学者によって論じられてきた。本稿は、ハックルベリー・フィンのジレンマを巡る問題を整理したのち、それらの問題を解決するためには、〈判断と情動はどのように対立し、また調停されるのか〉を解明しなければならないと指摘する。その上で、判断と情動の関係を説明するモデルを提示したい。

(2) 研究の背景・先行研究

Bennett が導入したハックルベリー・フィンのジレンマとは、以下のようなエピソードである。小説『ハックルベリー・フィンの冒険』(以下 AHF) において、主人公のハックルベリー (以下ハック) は逃亡奴隷のジムと共に筏で旅をする。AHF 第 16 章で、ハックは逃亡奴隷を探す男たちと出会い、筏に乗っているのは逃亡奴隷ではないかと尋ねられる。作中において逃亡奴隷を匿うことは (道徳的に) 悪いとされていたため、ハックは己の良心に従ってジムを通報しようとしたが、結局嘘を吐いてジムを助ける。このエピソードにおいて、ハックは良心に基づく判断とジムに対する共感の間でジレンマに陥っている、と Bennett は指摘した。

ハックのジレンマが興味深いのは、このエピソードが〈情動と判断が対立するとき、情動に従って意思決定や行為をするべきではない〉という主知主義的見解に対する反例になっているからである。ハックは、判断に基づいて行為することに失敗し、結局情動に基づいて行為したように思われるが、ジムを救うという帰結が道徳的に間違っているとはいえない。このエピソードを、先行研究は大きく二つの観点から論じてきた。第一の観点は、〈ハックの行為は称賛に値するか (praiseworthy)〉である。これは、ある行為に道徳的な価値があるとはどういうことかを巡る問いであり、代表的な仕事として Arpaly (2002) が挙げられる。第二の観点は、〈ハックの行為は合理的か〉である。これは意志の弱さ、あるいはアクラシア (akrasia) に基づいた行為は合理的でありうるかを巡る問いであり、McIntyre (1993) の影響が大きい。

いずれのテーマも重要かつ論争的であり、本稿において直接答えることは適わない。本稿の関心は、むしろ両テーマの前提にある。先行研究は、ハックの良心に基づく判断とジムに対する共感の対立を前提とし、ハックの行為と道徳的価値や合理性の関係を主題的に論じているが、本稿は、そもそもハックの良心に基づく判断とジムに対する共感が対立するとはどういうことか、

という問いに焦点を当てる。これは〈判断と情動が対立するとき、(道徳的にであれ合理的にであれ)どちらに従うべきか〉という規範的な問いではなく、〈判断と情動はどのように対立し、また調停されるのか〉という記述的な問いである。本稿は、判断と情動の対立と調停を説明するモデルを提示することで、この問いに答えたい。

(3) 筆者の主張

本節では、ハックの判断と情動の関係を説明するモデルを提示する。まず、ハックのジレンマではハックの判断と情動が対立しているとされているが、そもそもなぜこのような対立が可能なのかは説明を要するだろう。比較のため、判断同士の対立を考えてみたい。たとえば、私が足下のヘビをアオダイショウと見て〈このヘビは危険でない〉と判断したにもかかわらず、なぜか同時に〈このヘビは危険である〉と判断したとする。このとき、両判断の内容は対立しているというより、矛盾している。ハックの判断と情動の対立も同様の矛盾なのであれば、そのような心的過程が行為の道徳的価値に関係するとは思われないし、導かれた行為の合理性を問うこともできないだろう。

しかし、Döring に従えば、ハックの判断と情動の対立は矛盾なき対立 (conflict without contradiction) として合理性の枠内で説明できる。Döring によれば、判断と情動では内容に対するコミットメントの有無が異なる (Döring 2013: 182-4)。すなわち、判断はその内容、たとえば〈このヘビは危険でない〉に対するコミットメントがあるのに対し、情動はその内容、たとえば〈このヘビは危険である〉に対するコミットメントをもたない。たしかに、私がどれだけ平静を装って〈このヘビは危険でない〉と判断したところで、怖いものは怖いのであり、その現れは否定しがたいだろう。しかし、ヘビが怖いからといって、私は〈このヘビは危険である〉という内容にコミットしているわけではないので、判断と情動は矛盾なく対立しうるのである。

判断と情動が矛盾なく対立しうることを確認できたところで、ハックのジレンマにおける判断と情動の内容を整理しておこう。ハックのジレンマとは、ハックの良心に基づく判断とジムに対する共感の間における葛藤であったから、両者の内容を特定すればいい。先に、共感の内容を確認しよう。ハックのジレンマを導入した Bennett によれば、共感とは仲間意識の感じ (fellow-feeling) である (Bennett 1974: 124)。そこで、本稿はハックの共感を〈ジムは仲間である〉という内容をもつ情動として扱う。次に、ハックの共感と対立する判断の内容とは何か。ハックは己の良心に従ってジムを通報しようとしていたので、その内容は〈ジムを通報すべきである〉となるだろう。一

見、〈ジムを通報すべきである〉という内容と〈ジムは仲間である〉という内容は対立しないように思われるが、〈ジムを通報すべきである〉という内容は〈ジムは仲間でない〉という内容を前提していると考えられる。したがって、〈ジムを通報すべきである〉という判断は、その前提において、すなわちジムが仲間か否かを巡って、共感と対立しているといえるだろう。

また、ハックの判断と行為の関係を考えるためには、判断が与える理由についての整理も重要である。ここで、2種類の判断を区別しておきたい。まず、ハックのジレンマにおいて、ハックは〈ジムを通報する〉か〈ジムを助ける〉という行為のみが可能であったとしよう。すると、〈ジムを通報すべきである〉という判断は、〈逃亡奴隷を匿うことは悪い〉や〈ジムは持ち主の元に戻る気がない〉といった事情を考慮して、〈ジムを助ける〉ではなく〈ジムを通報する〉という行為を評価していることになる。ここで、〈ジムを通報すべきである〉という判断がすべての事情を考慮した (all things considered) 判断なのか、それとも一部の事情のみを考慮した一応の (prima facie) 判断なのかを区別するために、前者を ATC 判断、後者を PF 判断とよぼう。そして、〈ハックの行為は合理的か〉を問う先行研究は〈ジムを通報すべきである〉という判断を ATC 判断とみなしている (McIntyre 1993; Döring 2013)、本稿もそのように仮定して議論を進める。

以上の整理より、ハックルベリー・フィンのジレンマを巡る問題は以下のように特定化できる。まず、ハックは〈ジムを通報すべきである〉という ATC 判断を下す。しかし、逃亡奴隷を探す男たちを前にして、その判断と〈ジムは仲間である〉という共感が対立する。結局、ハックは ATC 判断に従わず、ジムを助けた。はたして、ハックの行為は称賛に値する／合理的であるといえるだろうか。

この問題に対し、本稿はその前提に焦点を当てる。すなわち、ハックの ATC 判断と共感が対立するとはどういうことだろうか。そもそも、これは不可解な対立である。〈ジムは仲間である〉というハックの共感は、〈ジムを通報する〉ではなく〈ジムを助ける〉という行為に理由を与える。しかし、〈ジムを通報すべきである〉という判断が ATC 判断であるならば、〈ジムは仲間である〉という事情も考慮した上で、ハックは〈ジムを助ける〉ではなく〈ジムを通報する〉という行為を評価したはずである。それにもかかわらず、なぜハックはジムを助けたのだろうか。このように、ジムを助けるというハックの応答が出力されるまでのメカニズムは不可解であり、〈ハックの行為は称賛に値するか／合理的か〉という問いを考えるためにもその解明が求められる。そこで、まずは一般に判断と情動はどのように対立し、また調停される

のかを説明するモデルを作り、その上で ATC 判断と情動が対立するとはどういうことかという問いに答えよう。代表的な情動理論を提唱し、判断との関係についても示唆的なプリンツ（2004）を本稿は参照する。

まず、判断と情動は矛盾なく対立しうるのであった。それでは、判断と情動が対立したとき、その対立はどのように調停されるのか、すなわち、主体がどちらの内容にコミットするようになるかはどのように決定されるのか。調停の基準として、まず情動の強度が挙げられるだろう。判断と対立する情動が無視できるほど弱ければ、主体は判断の内容にコミットし続けられればいいし、情動が極めて強ければ、主体は判断の内容にコミットし続けることが難しくなるだろう。一方で、判断と対立する情動が無視できるほど弱いわけでも極端に強いわけでもなければ、もはや対立を調停する基準はないように思われる。しかし、後述する通り、プリンツによれば情動は判断によって〈再較正 (recalibration)〉されうる、すなわち、判断を通じて引き起こされるようになりうるという。もし判断が情動に影響を与えうるのであれば、その関係によって判断と情動の対立が調停されるのかもしれない。そこで、プリンツの議論を確認してから、判断と情動の対立が調停されるメカニズムを検討しよう。

判断を通じて情動が引き起こされるようになることがあるとはどういうことか。例として、AHFにおける〈へびの皮に対する恐怖〉を取り上げる。AHF第10章において、なぜかジムはへびの皮に触れることは縁起が悪いと信じ、恐れている。そんなジムの迷信をハックは馬鹿にしていたが、たしかにハックがへびの皮に触れたのち、ジムがへびに噛まれたり、筏が予定通りに進まなかったり、挙句の果てには蒸気船に轆かれたりしたために、やがてハックもへびの皮を恐れるようになった（AHF第16章）。このエピソードは、以下で示す通り、〈へびの皮に触れることは危険である〉という判断によって恐怖が再較正された、と解釈することができる。まず、プリンツによれば、一般に情動は特定の状況によって信頼のおける仕方で引き起こされ、その状況に関する何かしらの情報を担う機能をもつ（Prinz 2004: 52-4）。しかし、恐怖はへびの皮に触れることによって信頼のおける仕方で引き起こされたりはしないし、それが危険であるという情報を担う機能もないだろうから、へびの皮に対する恐怖はそのような意味での情動とはいえないだろう。ただし、プリンツは、ある判断が何かしらの情動的な感じを信頼のおける仕方で引き起こすまでに強く情動と結びつくとき、情動は判断によって再較正される、とも主張している。つまり、情動は判断によって、元々引き起こされていた状況とは異なる状況でも引き起こされるように調整されうるのである（Prinz 2004:

99)。この考えをさきほどのエピソードに当てはめると以下のようになる。ハックがヘビの皮に触れたあと、ジムがヘビに噛まれたことで、ハックは〈ヘビの皮に触ることは危険である〉と判断し、また恐怖の感じを覚えた。さらに、その後も繰り返し危険が訪れたことで、〈ヘビの皮に触ることは危険である〉というハックの判断は、やがて恐怖の感じを信頼のおける仕方で引き起こすほど強く恐怖と結びつき、恐怖を再較正したのである。

この〈再較正〉という仕組みを参照することで、判断と情動の対立が調停されるメカニズムを説明できると本稿は主張する。調停のパターンは、大きく2通りに分けることができるだろう。まず、主体は判断を修正するだけで対立を調停できるかもしれない。数学に苦手意識をもっている、文学専攻の学生を例に考えてみよう。その学生は文学を学ぶつもりなので、数学の能力向上は自分の成長と関係がないと判断している。しかし、単位の都合で数学の授業を履修したところ、その勉強に喜びを感じていることに気がついた。ここで、やはり数学の能力向上は自分の成長と関係があると判断を修正するならば、数学の勉強に対する喜びとの対立は調停される。このように調停できる対立を〈浅い対立〉とよぼう。

しかし、主体が判断を修正しても、その判断とさらに対立する情動があるかもしれない。授業の内容が少し難しくなっただけでまったく分からなくなってしまえば、数学への苦手意識が蘇り、嫌悪感が生じるだろう。このような場合、判断を修正しようがしまいが対立する情動が存在するので、情動に変化が生じない限り、もはや対立は調停されなくなってしまう。しかし、判断は情動を再較正しうるるのであった。理解できなかった数式が理解できるようになったり、数学と文学に関係性を見出したりすることで、数学の能力向上は自分の成長と関係があるという判断は強く喜びと結びつくようになるだろう。そして、判断によって再較正されたこの喜びが、判断と対立する嫌悪よりも強ければ、その対立は情動の強度という基準によって調停可能になると考えられる。このようにしか調停されない対立を〈深い対立〉とよぼう。

以上のような、判断と情動の対立と調停のフローは、図1のように表せる。これを〈判断と情動の循環モデル〉とよぼう。

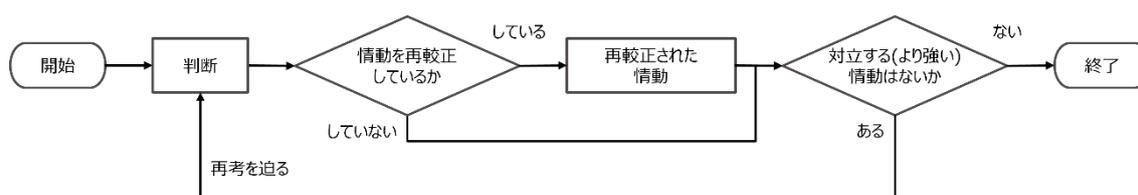


図1 判断と情動の循環モデル

これで、判断と情動はどのように対立し、また調停されるのかを一般的な仕方で説明するモデルが得られた。そして、PF判断やATC判断も判断の一種であることから、循環モデルは両者にも適用可能である。まず、PF判断と対立する情動があるということは、その情動が与える理由を主体が考慮する余地が残されているということである。そのため、ある評価的な判断がすべての事情を考慮したといえるためには、浅い対立であれ深い対立であれ、すべての対立が調停されていなければならない。したがって、ある判断がATC判断であるといえるためには、その判断と対立する情動は存在しないか、存在するとしても、その情動は判断が引き起こす再較正された情動よりも弱くなければならない。以上の整理から、ATC判断と情動が対立するとはどういうことか、という問いに説明を与えることができる。すなわち、情動と対立する判断がATC判断であるといえるためには、その情動よりも強い再較正された情動を判断が引き起こさなければならない。

最後に、循環モデルによってハックのジレンマを説明しよう。まず、〈ジムを通報すべきである〉というハックの判断はATC判断であると仮定する。この判断は、その前提において〈ジムは仲間である〉という共感と対立する。対立が調停されるためには、ハックが判断を修正するか、共感よりも強い再較正された情動が引き起こされなければならない。しかし、ハックは判断を修正したわけでも、共感より強い再較正された情動、たとえば正義感などが引き起こされたわけでもない。したがって、ハックの判断と共感の対立は調停されていない。しかし、情動と対立する判断がATC判断であるといえるためには、その情動よりも強い再較正された情動を判断が引き起こさなければならないのであった。よって、帰結は仮定と矛盾する。以上より、本稿は〈ジムを通報すべきである〉というハックの判断はATC判断ではなく、PF判断に過ぎない、と結論する。ハックはジムに対する共感が与える理由を考慮したわけではなく、ただ無視していたのである。

ただし、これは作中においてハックがATC判断を下さなかったということの意味しない。AHFは、もっと豊かな読みを許容する作品であるように思われる。第31章で、とうとうジムが捕まってしまい、再びハックはジムを助けるべきか否かで葛藤する。しかし、ハックは“All right, then, I’ll go to hell”と、奴隷を逃がす〈罪〉を受け入れ、ジムを助けると決意した。本稿は、この第31章でハックのATC判断が下されたと考える。このとき問題になっているハックの判断は、第16章時点の判断を修正した〈ジムを助けるべきである〉という判断である。しかし、ハックは判断を修正するだけで対立を

調停できたわけではない。なぜなら、その判断はさらに、そのようなことをすれば地獄に落ちる、という非常に強い恐怖と対立したからである。ここで、ハックのジレンマは浅い対立ではなく、深い対立であったことが分かる。それにもかかわらず、以下の解釈からハックの判断と恐怖の対立は調停されたといっているだろう。長い旅路の中で、ハックはいつしか〈ジムは仲間である〉という内容にコミットするようになった。しかも、その判断は共感の感じを信頼のおける仕方で引き起こすほど強く共感と結びつき、やがて地獄行きの恐怖さえ上回るほど強い再較正された共感を引き起こしたのである。以上の解釈より、第 31 章におけるハックの〈ジムを助けるべきである〉という判断は、地獄に落ちるといふ帰結まで考慮して、深い対立を乗り越えた ATC 判断であると本稿は主張する。

(4) 今後の展望

本稿は、判断と情動はどのように対立し、また調停されるのかを説明するモデルを提示した。一方で、本稿は（AHF 第 16 章における）ジムを助けたハックの行為は称賛に値するか／合理的かという、先行研究が焦点を当ててきた問題には答えられていない。

ただし、ハックの行為は合理的かという問いに対しては、そもそもハックの〈ジムを通報すべきである〉という判断は ATC 判断ではなかった、という積極的な含意を本稿はもつ。しかし、これは問いの重要性をまったく減じないだろう。私たちは、時間や情報など、ATC 判断を下せるだけの十分なリソースがない中で意思決定や行為を求められることがよくある。したがって、本稿はむしろそのような状況下における実践的合理性を追究する重要性を示唆している。

また、ハックの行為は称賛に値するかという問いに対しても本稿は示唆的である。行為の理由は道徳的に正しいか、その理由を与える判断は行為が称賛に値するために必要かといった道徳的価値を巡る問い（Arpaly 2002）は、まさに循環モデルとの関係において特定化されるだろう。

(5) 参考文献

- Arpaly, N., 2002, "Moral Worth," *The Journal of Philosophy*, 99(5): 223-45.
- Bennett, J., 1974, "The Conscience of Huckleberry Finn," *Philosophy*, 49(188): 123-34.
- Döring, S.A., 2013, "Emotion, Autonomy, and Weakness of Will," Kühler,

- M. & Jelinek, N. eds., *Autonomy and the Self*, Springer, 173-90.
- McIntyre, A., 1993, "Is Akritic Action Always Irrational?," Flanagan, O. & Rorty, A.O. eds., *Identity, Character, and Morality: Essays in Moral Psychology*, MIT Press, 379-400.
- Prinz, J.J., 2004, *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*, Oxford University Press. (源河亨訳、2016、『はらわたが煮えくりかえる——情動の身体知覚説』勁草書房)
- Scarantino, A. & de Sousa, R., 2021, "Emotion," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, (Summer 2021 Edition, <https://plato.stanford.edu/archives/sum2021/entries/emotion/>).

(一橋大学)